

「十住心思想」をめぐる『大疏』と『菩提心論』の研究（1）

大沢 聖 寛

目次

第一章「十住心思想」について

- 1、源流
- 2、綱要

3、『十住心論』と『秘藏宝論』

4、横の義と豎の義

第二章『十住心論』の「大綱」

第三章「十住心思想」と『大日経疏』

1、『十住心論』の構成

2、『十住心論』に引用された『大日経疏』

3、まとめ

第四章「十住心思想」と『菩提心論』

1、『秘藏宝論』の構成

2、『秘藏宝論』に引用された『菩提心論』

3、まとめ

第五章結論

第一章「十住心思想」について

1、源流

弘仁一三年（八三二）頃の撰述（弘法大師空海〈以下空海とする〉四九歳）とされ

「十住心思想」をめぐる『大疏』と『菩提心論』の研究（1）

る『太上天皇灌頂文』（『三昧耶戒序』）に、今授ける「三昧耶仏戒」は、大毘盧遮那自性法身の説く所の真言曼荼羅教の戒であつて、善男子善女人、比丘比丘尼、清信男女等が真言密教に入つて修行しようと欲するものは、まず一には信心、二には大悲心、三には勝義心、四には大菩提心の四種の心を発すべきと説いている中、第三の勝義心、つまり深般若心の箇所に、次のように「十住心思想」が説かれている。

異・生・羂・羊の凡夫は、専ら十不善等の業を造り三毒五欲の樂に耽つて、曾つて後身の三途の極苦に墜ちることを知らず。是の故に真言有智の人、樂著すべからず。愚・童・持・齊・人・乘の法は、漸く因果を信じて五常五戒等を行はずといふと雖ども、猶し是れ人中の因にして生天の樂を得ず。是の故に樂著すべからず。嬰・童・無・畏の外道生天の乘は、下も四天王より、上も非想に至つて二十八天の樂を受くといふと雖ども終に人中地獄等に墜して、生死を出づることを得ず。是の故に樂著すべからず。唯・蘊・無・我、拔・業・因・種の二種の羊鹿乘は、三界を出ずと雖ども猶し是れ下劣なり。三・生・六・十の劫・七・八・四・百の時何ぞ其れ眇焉なる。是の故に樂求すべからず。他・縁・大・乘・覺・心・不・生の二種法門は、身命を捨て布施を行じ妻子を許して他人に与え、三大阿僧祇を経て六度万行を行ず。劫石高廣にして盡き難し。弱心退き易くして進み難し。十進九退す。吾れまた何ぞ堪えん。如・實・一・道・の・心・は、心・垢・を・拂・つ・て・清・浄に入り境智を泯して如如を證すといふと雖ども、猶し是れ二・道・清・浄の樂にして、いまだ金剛の寶藏に入らず。是の故にまた住すべからず。極・無・自・性・心・とは、法界を融して三世間の身を證し帝綱に等しくして一大法身を得といふと雖ども猶し是れ成佛の因初心の佛なり。五相成身四種曼荼未だ具足することあたわず。是の故に住すべからず。いわく未得を得とし、未到を到といえり。是のごとく如来の教勅によつて最上の智慧をもつて乗の差別を簡んで菩提心を發す。もし人等あつて

是のごときの車に乗って所行の道を行ずるをば、未だ最上の淨菩提心とは名づけず。是の故に真言門の菩薩はこの諸の住心等を超えて菩提心を發し、菩提の行を行ず。この乗の差別を知らんがために深般若の勝義心を發す¹⁾。

と説かれ、またこの『三昧耶戒序』の最後に再び深般若の勝義心にて、今示した九種の住心を觀れば、これらにはそれ自体の本性はないとして、次のように説いている。

諸法は、皆縁より生じて自性なし。是の故に異生羝羊の凡夫一向に惡心なれども、善知識の教誨に遇うが故に愚童持齊心を起す。愚童人乗の人因果を信するが故に、生天護戒の心を起す。嬰童無畏心なり。嬰童無畏心は殊勝の解脫智を願うが故に、善知識の誘に依つて唯蘊無我拔業因種の二乗の心を發す。二乗の人諸佛の驚覺を蒙るが故に他縁大乘心を起す。他縁乗の人最勝の果を願うが故に覺心不生心を起す。覺心不生の人自性無きが故に一道如實の心を起す。一道如實の人諸佛の驚覺を蒙るが故に極無自性心を發す。極無自性の人究竟最勝の金剛の心を願うが故に秘密莊嚴の心を發す。是れ皆な自性無きに由るが故に展轉して勝進す。深般若をもつて自性無しと觀するが故に、自然に一切の惡を離れて一切の善を修し自他の衆生を饒益す。即ち是れ三聚妙戒具足して缺くること無し。秘密三摩地に住するもまたまた是のごとし²⁾。

ここには、異生羝羊の凡夫、愚童持齊の心、嬰童無畏心、唯蘊無我拔業因種の二乗の心、他縁大乘心、覺心不生心、一道如實の心、極無自性心、秘密莊嚴心の十住心思想の各住心の名称が説かれている。このことは空海四十九歳の時にすでに十住心思想が完成されていたことが考えられる。

2、綱要

ここで十住心思想の概略を『秘藏宝論』の十住心の綱要の現代語訳で示すと、

第一異生羝羊心

迷っている者は、非常に酔つてみずからのつみを理解出来ない。ただ性欲と食欲を常に心にとめて思う。あのおひつじのようである。

第二愚童持齋心

他の原因によって、突然節食を願う。ほどこす心が芽吹き始めるのは、まるで穀類があらゆる条件によって芽吹き生長するようなものである。

第三嬰童無畏心

仏教以外の他の宗教の教えで、天に生じて、しばし生死の苦痛から逃れて一息つくのは、あのみどりごと子牛が母にしたがって、何人の畏れも持たないようなものである。

第四唯蘊無我心

ただし法の本体は実在しているが、行為の主体は否定する。声聞の經・律・論の三藏はことごとくこの句におさめられる。

第五拔業因種心

わが身の存在の基本的構造の十二因縁を十分會得して、根本的な無知の種子をぬく。行為のはたらきによる生ずることもこのらず除いて、他人の教を聞かず、自分独自の方法で悟りを得る。

第六他縁大乘心

原因条件のないいきとしけるものにもあわれみの心をおこし、大いなる慈悲が初めておこる。外境はまぼろし、かげの如しと心にみる唯識法相の教にあるごとく外界のとらわれを絶つ。

第七覺心不生心

不生・不滅・等、八不の中道の実践により無益な議論を絶ち切り、いちずにあらゆる物事の空を觀じ、心性が空無となって、すべての執着を離れた境地となって、心の安らぎを得る。

第八如實一道心

真実のありのままのすがたは本性として、清らかであり、認識の対象も対象を觀照する智慧も共にとけあっている。このような心の本性を知るものを、稱して毘盧舍那というのである。

第九極無自性心

水は本来それ自体の本性は無い。風が吹けば波が立つのであり、華嚴宗で説く事事無礙法界の世界も、きわまった世界ではないといういましめによって、にわかに進む。

第十秘密莊嚴心

顯教のおしえは、煩惱のほこりを払い、真言密教は庫を開く。そこには秘宝が即座にしめされて、数えきれない多くの功德を明らかにされている³⁾。

このように十住心思想は、平安時代初期の思想・宗教を区分し、その特色を示し、それが人間の心の解明であり、菩提心の展開の思想であることを示したのである。

3、『十住心論』と『秘藏宝論』

『秘密曼荼羅十住心論』（以下『十住心論』とする。）と『秘藏宝論』の関係は、両書共に天長の勅撰宗書である。このことは、『十住心論』では「帰敬序」に、
天の恩詔を奉りて秘義を述べ、群眼の自心に迷えるを驚覺して 平等に本四曼の入我我入の莊嚴の徳を顯證せしめん。^⑤

また『秘藏宝論』では「発起序」に、

われ今、詔を蒙つて十住を撰す、頓に三妄を越えて心真に入らしめん。^⑥

と示されてあることより、判明する。

また『十住心論』と『秘藏宝論』の撰述関係は、『秘藏宝論』の中に、第二愚童持斎心に「つぶさには『十住心論』のごとし」と説かれてあり、さらに第三婴童無畏心、第四唯蘊無我心、第五拔業因種心にも、『十住心論』に説かれていることが示されていることによつて、両書の前後の成立関係は明らかである。

淳和天皇の天長年間に諸宗に宗義を提出せしめたといわれ、これを天長の六本宗書と称するが、その奥掟に、法相宗、元興寺護命（七四九—八三四）撰の『大乘法相研神章』五巻の序に、

今我が聖朝、普く諸寺に勅して宗要を上らしむ、護命幸いに昌運に遇ひ、久しく道家を経、年齒八十、形神衰耄せり、爾りと雖も親り勅旨を承け、悦んで虚懷を撫す。謹んで世界問答五巻を上り、名けて大乘法相研神章と曰う。……時に天長七年歲次庚戌建巳之月なり^⑦

と示されているが、勅命にて撰述し、天長七年（八三〇）、空海五十七歳の頃の著作である。

広論である『十住心論』に引用された経論は、『大日経』、『大日経疏』、『觀佛三昧経』、『灌頂経』、『薩婆多毘尼毘婆沙』、『十誦律』、『成實論』、『王法政論経』、『十住毘婆沙論』、『大乘同性経』、『文殊問経』、『俱舍論』、『順正理論』、『大智度論』、『成唯識論了義燈』、『瑜伽師地論』、『守護国界主陀羅尼経』、『法華経』、『四分律疏』、『阿毘達磨雜集論』、『菩提心論』、『理趣経』、『理趣釋』、『六波羅蜜多経』、『瑜伽觀智儀軌』、『金剛頂大教王経』、『金師子章雲間類解』、『新華嚴疏』、『華嚴五經止観』、『圓覺了義経』、『大乘起信論』、『釋摩訶衍論』、『金剛頂瑜伽瑜祇経』、『一字頂輪王経』があり、『凡聖界地章』は、今示した經典類を除いても、次の引用經典類を引用されている。

『起世経』、『俱舍論記』、『瑜伽論』、『仁王経』、『正法念處経』、『六十華嚴経』、『雜藏経』、『十二門論』、『八十華嚴経』、『仁王般若経』、『金光明経』、『増一阿含経』、『成唯識論』、『

『無性懺論釋』、『掌中論』、『顯揚聖教論』、『十地経論』、『菩薩瓔珞本業経』等である。この他『諸経要集』、『法苑珠林』、『辯正論』、『四分律行事鈔』、『阿毘達磨雜集論述記』、『大乘法苑義林章』、『大乘玄論』、『三輪玄義』、『摩訶止観』、『華嚴五教章』は、『凡聖界地章』のように他の經典を引用し、『十住心論』全体の引用文献は膨大な数に上り、組織的な著作であると同時に、空海みずからの文章は少なく、編著とも考えられるのである。

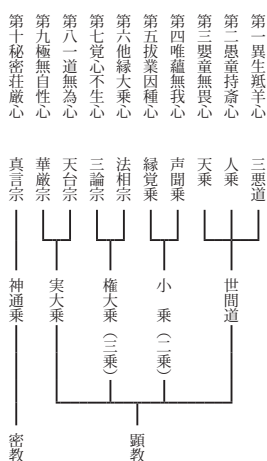
これに対して、『秘藏宝論』の略論は、『大日経』、『菩提心論』、『仁王経』、『賢愚因縁経』、『守護国界主陀羅尼経』、『十住毘婆沙論』、『釋摩訶衍論』、『大日経疏』、『金剛頂大教王経』、『金輪時処軌』の引用文献のみで、十住心思想が無駄なく、はっきりと説かれている。

4、横の義と豎の義

『十住心論』と『秘藏宝論』の思想の違いについては、「横の義」と「豎の義」に分類されるのであるが、このことは『十住心論』の「大意序」に、

若し豎に論ずればすなわち乘乘差別にして淺深あり。横に觀ずればすなわち智智平等にして一味なり。^⑧

と示されている。『秘藏寶鑰鈔』巻上一に、有快（一三四五—一四一六）高野山学匠が、二門四義、あるいは横豎四義を説いている。^⑨第一は、前の九は顯第十は密なり。第二は、十住心は是れ真言行者住心の次第なり。第三は、十住心は是れ五種の三昧道の法門なり。第四は、この十住心は大日如来の善門萬徳を開示す。と説かれ、この中第一は、別の表現をすれば、『顯密合論の十住心』であり、第二は、「心統生の十住心」である。初めに「顯密合論の十住心」を表示すると次のようである。

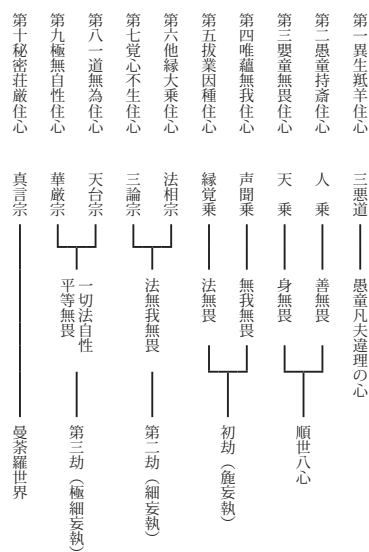


この「顕密合論の十住心」は、インド思想、中国思想、日本の諸思想と真言密教を比較し、真言密教を明らかにした九顕一密（非連続的・異次的元的^⑫）の思想であり、『秘藏宝鑰』は構造から顕密合論である九顕一密の十住心思想を説いたものであり、空海は、その著『秘藏宝鑰』の「大意序」に、

九種の心薬は外塵を拂つて迷を遮し、金剛の一宮は内庫を排いて寶を授く。^⑬

と説いて九顕一密の十住心思想を著している。

次に「心統生の十住心」を表示すると、次のようになる。^⑭



心統生の十住心は、真言行者が修行をする過程で、菩提心の修行がつき進む状態を十段階に分けて説いたもので、九顕十密（連続的）の思想であり、空海の著作である『十住心論』はその構造から心統生の十住心、九顕十密の十住心思想を説いたものであり、この十住心の思想の大意は『大日経』『住心品』に依って構築されており、空海は、その著『十住心論』の「大章序」に、

また問すらく。菩提に發趣するの時、心の所住の處の相續の次第に幾く種がある。佛つぶさにこれを答えり。故に經の初の品を名づけて住心という。今この經によりて真言行者の住心の次第を顯わす。顕密二教の差別またこの中にあり。住心無量なりと雖ども、しばらく十綱を挙げてこれに衆毛を攝す。^⑮

と説き、また同じ『十住心論』第三の「真言の密意」に、

もし真言の實義を解すれば、すなわち若しは天、若しは人、若しは鬼畜等の法門みな是れ秘密佛乘なり。^⑯

とある。

第二章『十住心論』の「大綱」

ここで『十住心論』の「大綱」すなわち大要を示すにあたり、『十住心論』と『秘藏宝鑰』の大要を比較すると、第一異生羴羊住心、第二愚童持斎住心、第三聖童無畏住心、第四唯蘊無我住心の大要は、『十住心論』が『秘藏宝鑰』より詳しい説明がされており、また第十秘密莊嚴住心は、『秘藏宝鑰』では、頌文のみである。第五拔業因種住心、第六他緣大乘住心、第七覺心不生住心、第八一道無為住心、第九極無自性住心は、『十住心論』と『秘藏宝鑰』と同文であることにより、『十住心論』の「大綱」を示すこととした。

異生羴羊住心第一

異生羴羊心とは、平凡な人間の善と惡とを知らない迷いの心であり、愚かな人間が、因果の道理を信じない執着の心のことである。われ自身とわれの所有する物という執われをいつも心の中に懷いて、誤まった虚しい計らいをいつまでも心に蓄えている。さまざまな事柄や物に実体がないのに求め、そして激しく執着し、華やかな灯火に心を向け、そして身を焼く。まったく雄羊の草を食べることと、性欲を行うことばかり思うに同じく、逆に子供が水に映る月を欲しがるのに似ている。

ついぞ自己の本性を觀察することがなくて、どうして真理の真実を知ることができるか。教えに背き心理に背くことは、このことより生ずるのです。過去世から無限に続いている無知が続いて絶えることなく、めぐりめぐる様は車輪に比べられ、定めのない玉の輪と同じである。夕暮れが長く遠く、暁天の金鶏の音が響くことがないのである。雲や霧が盛んで暗くて、太陽や月を明るく掲げることができない。やって来た迷いの道は始めが無いのであるから、人間と天との世界の衆生は道理に暗く、誤った考えから目覚めた世界（本宅）に帰るのはいつの日であろうか。迷いの世界の生老・病・死・愛別離・怨憎会・求不得・五陰盛の八苦の自覚的内容をしらないで、どうして罪の報いが地獄・餓鬼・畜生の道に墜ちるということを信じることがあろうか。しまいに、栄養があつて味のいい食を水と陸に求めて貪り、女性の麗しき顔色を天地に楽しむ。鷹を放ち、犬をうながして、腹を満した鳥獣の命を断ち、馬を走らせ、弓を引いて、よき舌のけもの身を殺す。山あいの小さい溪谷を水の涸れた状態にして魚類を全部とり尽くし、藪を滅ぼして鳥類を殺す。鳥類と鳥類を合せて周りを取り巻き楽し

み、多数の獲物を捕ることを手柄としている。殷の湯王が獵師の網を解かせて鳥獸の命を救った情けを振り返らないで、どうして罪がないのに泣く悲しみの行為をできようか。酒や女色に耽るほどあいを考えず、昼も夜も楽しむこと激しく。ある時は他人の金銭と品物を掠めとり、他人の妻妾を盗み犯す。嘘を吐くこと、ふざけた言葉、人を悪し様に言う、二枚舌の四つの失言と、貪り、怒り、よこしまな考えの三種の心中に非とすることは、衆生と教えを謗することは、強欲極悪の人を時きつけてふやす。このような悪行は時として行われなければならないことではなく、目として行じないことはない。君主に対して、臣下たる本分を全することなく、よく父母に仕えることなく、人間の行うべき筋道もなく、思いやりの心もなく、儒教の仁・義・礼・智・信の法の網の働きもなく、仏教の声聞・縁覚・菩薩の三乗の教えにて一纏めに閉じ籠めることが出来ない。よこしまな師を元祖として習い、よこしまな教えをより所としている。決して出離生死の要道を求めず、頓すらに眼前の快樂のみをいそしんでいる。このような衆生を名づけて愚童羝羊というのである^⑧。

愚童持齋住心第二

愚童持齋心とは、取りも直さず人間の世界の善い心の芽生え、凡夫が悟りに帰るものである。永遠にわたる時間に芽の出ない種子が春に鳴る雷にであって殻が割れ、ふと思い出した善心の芽生えがちようどよいときに降る雨に洗われて芽をふく。自分が食べる食物の量を減らすことで、同情と憐れみを成就し、親しい人にも、間がらの遠い人にも、施しを行なう。欲が少ない想いが始めて生じ、わずかなもので満足する心がようよう起こる。すぐれて高い徳の人を見てとうとび重んじ、衆人の奏する音楽で供養する。間違いを知れば必ず改め、勝れた人を見てはその人のようになろうと思ひ。初めて因果の道理を信じ、だんだんと罪惡と福德の結果を承知する。両親を大切にし、君主に対して誠意を尽くす。善い行いを見て自分には及ばないと顧みること、人が沸き立った湯に手を入れれば直ぐにその手をひっこめるような悪事がなくなる。仏教と外道の三帰依の心は、このような状態から起こり、人間の世界と天界の十種の善い行いはこのような状態から修行されるのである。初の種子・牙種に庖種・葉種・敷華・成果・愛用種子・無畏・殊勝・決定の十種の心地が相ついで生ずる。羝羊（牡）を冬枯れの樹に喩えて、すぐに春の園の錦の花が咲き、異生である凡夫に喩える。石が多くて耕せない田畑は、すぐに秋の田畑うねが茂って実る。人間の世界と天界の十種の

心地は、ここにおいて初めて開けて、声聞・縁覚・菩薩の三乗の位いの順序が相ついで生じるのである^⑨。

嬰童無畏住心第三

空を飛ぶ羽のある虫の幼虫（蠶虫）は決まって蠶虫ではない。想像上の大魚（鯢魚）は必ず鯢魚であるとは限らない。泥から出てすぐ大空を鵬となつて行きわたり、水を打つてすぐ風上に体を横ばいにした状態で飛びあがる。第一住心である異生羝羊・心牡羊の人もこの点で譬えることができる。第二住心である、愚童持齋心の人もまた同様である。羝羊心の人も固有の性質がないので善心に移り変わり、愚童心の人も心の内の真如が無明に薰習する力で苦しみをいやがる心が起こる。戒めを守って天の世界に生まれ、善い行為を實踐して、地獄からぬけようとするのは、苦しみの生存にくしむ心がすこし起こり、向上しようとする喜ぶ願いが初めて起こる。この時に抛り所を諸天の童王に求め、慎みてまことを鬼神にはたし、苦を抜くあわれみの心を仰いで、衆を与える思いやりの心を祈る。影の形に随うがごとく正しく、響の声に応ずるが如し。地獄・餓鬼・畜生の三途の身心を苦しめることは、前世の原因である十惡業が尽きれば出ることができるし、色界における四つの段階的境地である四禪の樂である報いは、今世の因縁である十善によつて昇るのである。因果の法則は信じなければいけないのである。罪惡と福德を用心しなければいけないのである。鐘も打てば響き、他にも声にこだまし、因果の道理の必ずそうなることの喩であり、嬰童は向上しようとする最初の心であるので、この名前を得、無畏（畏れないこと）は惡童の制限から離れることについて称するのである^⑩。

唯蘊無我住心第四

最初に大体の意義は、尺取虫が身を曲げるのは、のびようとするからで、車輪は上を向いてまた下る。非想非非想処は八万劫の寿命をもつが、上空に矢をいっても下に落ちるがごとく、下界に必ず落下する。仏教以外の他の宗教の瞑想の境地は迷いの果をなくそうとするが、かえって迷いの果である有の中に没するのである。欲界から解脱を願つても、未だ煩惱を絶つ劍を得られないのである。個人存在としての我は実体がないと理解しないで、なんで一切は縁起によつて起こるもので、実体がないという真理観に目覚めようか。この理由によつて生死に迷いつづけて、涅槃を得ることがで

きない。仏はこのようであることを不便に思つて、迷いを離れる道をお説きになられた。衆生は、五蘊が仮に和合して成立したものであつて、実体がないという教えをもつて説き、実体としての我があると思う妄想を幻化と陽炎に喩える。二百五十戒は身と口でなす行為のあやまちを防ぎ、三十七種の悟りへの適切な方法は、身と心の善い行為を修め行ふ。時間で説けば素質の勝れている者は、三生（成仏）、能力の劣つた者は、六十劫を要します。修行の結果から示すと、預流・一來・不還・阿羅漢の向果を立てる四向四果である。認識作用は眼・耳・鼻・舌・身・意の六種の働きであり、色法・心法・心所法・心不相応法・無為法の五種に分類し、苦諦・集諦・滅諦・道諦の四種の基本的真理と身体は不浄であり、感受は苦であり、心は無常であり、すべての事物は無我である四つの観想法を登き、六種の起人的な力と八種の禪定にその証拠を得る。生死をいとい恐れて身体と心共に全くの無に歸し、湛然寂靜なる涅槃を喜び従い、虚空に等しい。これ声聞の自分のための修行の効果であり、声聞の欲界からの解脱の方法である。およそかくのごとくである。

拔業因種住心第五

拔業因種心とは、麒麟が一つの角のみをもっていることに喩えて、一人で修行して覺り、仲間を作つて修行する緣覺（獨覺）の行いである。十二因縁の道理を觀じて、生と死を地・水・火・風の四大と色・受・想・行・識の五蘊の姿を憎み。華や葉を見て、咲いたり、散る様子から生まれ、存在し、変わり、無くなる四つの姿の無常である移り変わりを覺り、林や村落に住んで禪定を無言に証得する。この禪定によりて惡行と煩惱の切株を除き去り、根本的な無知の種を、これによつて断つ。バラモンや犢子外道は遠く隔たつていて欲すれども、近づくことができないし、建立、声論の外道はどうして隙をねらうことすらできない。高妙にして靜かなる水が淀んで深い所に泳ぎ、悟りの世界にのんびりしている。自ずから具わっている戒は授けられることなく具わり、師が無くても真実の智慧を自分で手に入れる。悟りの体得のための三十七の修行方法は、他者の教によらないで悟り、五蘊、十二処、十八界の善い行為は藍色を待たずして、青色があるがごとく理解している。身に起人的な力をもつて人を濟度し、音声または文字を手段としない。大いなる哀れみが無いので、衆生利益のための手段を備えていない。ただ自分自身の苦しみを無くして悟りを完成する。

他緣大乘住心第六

ここに大乘の菩薩の教えがある。名前を樹てて他緣大乘心と称する。建立外道である因緣論者と長爪梵志である爪を長くしたバラモンを乗り越えて、高く昇り、声聞・緣覺を超えて広く運ぶ。人法・二空・遍・依・円の三性の教えを理解して、自分のとらわれの塵を洗い、慈悲喜捨の四無量心・布施・愛語・利行・同事の四摂法によつて、他者を救ふことを斉える。阿陀那識である一つの潜在意識の深く微細な働きを考え廻らして、幻化と陽炎のごときものと思つて、この考えにひたすら意をそそぐのである。また百由旬四方もある大城中に満つる芥子が無くなつて、また満たされ、盤石が磨り切れてなくなり、また生ずるような無限の長い年月の修行を必要とし、修行の五位の一つである第一の資糧位においては、間にある三種の退屈に対して心を練磨し、四弘誓願と修行によつて、後に生まれかわつた身の悟りを仰ぎ望む。第二の加行位に於ては、心を一つの対象に住せしめて平等に継続し、保つことを修して、識のみが真実に存在するものであつて、下界の対象は、識が現れたものにすぎないという唯識無境の觀に住する。第三の通達位においては、天魔中の王である惡魔の軍營を征つて、悪い心の働きである賊の頭を敗る。第四の修習位においては、八正道の実踐徳目の兵を整然と行動させて、四摂法の一つである同事の助けあつて仕事をする繩をもつて導き、六神通の選り抜きの騎兵を走らせて、般若の利劍を振り動かして活動して煩惱を殺すのである。第五の究竟位においては、修行のてがらによつて、世間の爵位である五等の位に昇つて、八識の心王を立てるに、常・樂・我・淨の四徳のすべてをもつてする。唯一絶対の究極の真理の悟りは大變靜かに治まり、言語による表現を超えた平穩の風を屏ぐ。真実のありのままの姿の高殿に、衣をたれ手を組んで敬礼し、真理の館にひっそりとしている。三大阿僧祇劫という無限に長い年月の修行した菩薩を、帝王と称せられ、四つの智慧を具えた仏の名称を初めて得られた。それゆえそこで、第八アラーヤ識の海は、生ずる七識の波浪をやすめ、五蘊である色・受・想・行・識の聚落には六塵である色・声・香・味・触・法の害を終らせる。平等にはたらく真実の智慧の蓋は、真如常住の函とよく合うように、後得智は衆生濟度に働き、この大悲心は、もろもろの状態の生類に遍くゆきわたる。經・律・論の三蔵のきまりを作つて、声聞と緣覺と菩薩との有情を導き、十善戒のきまりを作つて、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六趣の生きものを導く。乗についていえば、声聞と緣覺と菩薩の三乗であり、識についていえば、眼・耳・鼻・舌・身・意の六識と第七末那識、第八阿賴耶識

の八識である。またこの住心では、人間の本性を五種類に分け、菩薩の本性に決定している者、縁覚の本性に決定している者、声聞の本性に決定している者、いずれにも本性が決定していない者、無種の本性の者の五つがあると説く。

また仏の三身については、自性身は常住であるが、受用身、變化身は生滅をするのである。その生滅をする受用身と變化身の中、百億の變化身（応化身）は六波羅蜜の舟を浮かべて法を説き、蓮の花の千の花弁上の釈迦牟尼仏は、声聞乗・縁覚乗・菩薩乗の三つの教えを等しく授ける。

全世界の生あるものを教化の対象とするので他縁といい、声聞、縁覚（独覚）の羊車・鹿車共に小乗で、これを選び捨てるので「大」という。自己と他者を円成實性である、悟りの境地に運ぶから「乗」という。これは言い換えれば徳が高くて品位が備わった人の行う行為であり、菩薩の心を用いることである。中国の揚子江以北の法相宗の大意は、まさしく此の様である。²³

覺心不生住心第七

それ、大空は広々として大きく、総てのものを一気の中に含み、大きな海が深く澄んで沢山の種類のものを一滴の水の中に含んでいる。本当にそれと同じように、一というものは、百千の数の多いことの母である。空は現象として存在するものの根本条件である。現象として存在するものは所有ではないが、存在するものとして、限りなくさながら存在している。絶対の空は実体が無いということではないが、無空として止まらない。形ある色は、実体がない空に違わないから、総じてのものを顕にして、さながら空である。実体のない空は、形ある色はとりもなおさず実体のない空であり、ながら所有である。この理由によつて、形ある色はとりもなおさず実体のない空である。実体のない空はとりもなおさず形ある色である。総てのものもまたその通りである。どういう物でもそのように無いものはない。このことは丁度水と波のはなれない関係に似ているのである。同質の黄金とその黄金で鑄造された莊嚴具に種種あるけれども本質は異ならない関係と同じである。多数と団体という呼び名の義が成り立ち、真実の見方と世俗一般の見方とが、対偏中・尽偏中・絶待中・成仮中の四つの中が説かれ示される。空の自性に因われなさと観念し、道理を欠いた思慮分別を八つの否定である中道の実践によつて越える。この時に人びとを悩ませる、煩惱魔・陰魔・死魔・他化自在天魔は戦わないで、両手を後ろ手に縛り、面を前に向けて降伏し、三つの煩惱

の貪・瞋・癡は命を取らなくても、打ち負かし消滅する。迷いの世界そのままが悟りであるから、ことあらためて上位下位の位置をさだめたものはない。妄念が取りも直さず悟りの境地であるから、妄念を断ち悟りを得るほねおりを必要としない。しかしながら等級の無い中の等級であるから、その立場からすれば、修行の段階を五十二に等級を分けても妨げることは無い。等級を立てた中の等級が無いのであるから、一瞬の心の覚りを成就することは妨げない。一瞬の心に観ずる智慧にて三大阿僧祇劫を経過して、自からの修行に努力し、一乗である菩薩乗に声聞・縁覚・菩薩の三乗の教えに心をむけて、他人を教化することに務める。第四唯蘊無我心である声聞乗は本性をもたないという理を知らないことを悲しみ、第六他縁大乘心である法相宗は識智のみが真実に存在するものであつて外界の対象である境は無いとして、境と智を反対の立場として考え、境界と識智は共に空であることを知らないことを歎いている。そして

当住心の覺心不生心である三論宗では、アーラヤ識である心王は自由自在であつて、本体は水のごとく本性清浄であり、心王の上に起る心の働きである煩惱は動きと濁りの波を停止する。真実の智慧と仮の智慧は、円満なる悟りを、真実ありのままの姿に証し、第一義諦と世俗諦は絶対中道の理論をえる。不変なる心の本性の不生不滅を悟り、認識の対象（境）と対象を觀照する智慧（智）の異なることを知るのである。これが中国の揚子江の南に弘まった、中觀哲學を説く三論宗の教の眼目である。²⁴

一道無為住心第八

孔子は中国に生まれ出で、仁・義・礼・智・信の人の常を守るべき五種の道徳である五常を中国の全土に説かれ、釈尊は天竺すなわちインドに生まれて、一仏乗を人乗・天乗の小草と、声聞乗・縁覚乗の中草と、菩薩乗の上草との三乗に説き明かした。それなのに心の狂い酔いしれている衆生は孔子が説いた五常の道に進まず、無明の人民は釈尊が説き明かした説法の座を去つて、帰つてこなかった。孔子は七十名の弟子がその真理に到達した者で、その道の深くまで達し、一万二千の同聞衆の羅漢たちが、釈尊の説法を理解したのである。中国内においては、仁・義・礼・智・信の五種の道徳は教えが合わず、インドにおいても、大百牛車の法華一仏乗には方便の三乗の大乗と小乗の人々は乗ることはなかった。

この理由によつて釈尊は悟りを完成した後、二十一日間菩提樹下で人々をどう教化しようかと諸の思いを回らし、四十年の間、受法機まで妙法を説かなかった。最初に

四聖諦を説き、『方等經』を説いて、人執と法執との二つの垢がついて汚れているのを洗い、後には一乗の教えを説いて、三草（三乗教）二木（二乗）である草に大・中・小の草、大・小の木は不同であつても、雨に潤むされると、総て育つて藥用になるように、あらゆる人々の仏性の芽葉を潤す。

『法華經』の「序品」では法華三昧である蓮華が泥の中にあつても、清浄な華を咲かせるように、総ての人の本来の性質は清浄であることを觀じ、仏の眉間の白毫より淨光を発して、人々に修行によつて完成する普く照すことを表わす、かくのごときは、「方便品」では、声聞・緣覺・菩薩の三乗がそのまま一仏乗であるという、悟りに徹する仏の智慧の深くして無量なることをほめたたえ、「壽量品」では、仏陀伽耶城の近くで成道した釈迦仏である迹門の仏は、実に久遠の昔に成仏した本門の仏に外ならないことを説く。「宝塔品」では宝塔が地よりおどりあがつて、多宝仏と釈迦牟尼仏が七宝の塔に同席して空中に止まることを説き、また「從地涌出品」では、娑婆世界の三千大千の国土が震え裂けて、その中より、無量千万億の菩薩・摩訶薩が、本化の四大菩薩である上行菩薩、無辺行菩薩、淨行菩薩、安立行菩薩と共に、地中から現われ出たことを説いている。また「安樂行品」では、法華一乗の法を説くことは、轉輪聖王が髻の明珠を解きてこれを与えることが明かされ、「普門品」では、觀世音菩薩が無尽意菩薩より供養された瓔珞を分かちて二分と作して、一分は釈迦牟尼仏に奉り、一分は多宝仏の塔に奉つたことが説かれている。「譬喻品」では、智慧第一の舍利弗が今まで声聞乗と緣覺乗の教えを聞いて悟りを得ていたのに、三乗を聞いて一乗に歸せしむる法華經の教えを聞いて驚き、仏が悪魔に変化したのではないかと疑い、「從地涌出品」では、妙覺の仏果を得ようとする位の弥勒菩薩は、本門の正説をなす中で、父は若くして、子は老いたるを怪しんだと説かれている。「方便品」では、唯一の本質である衆生をして仏の知見を聞き示し、悟り入らしめるためのこよなき真理が説かれ、ただ一つの道である、一切衆生を平等に仏とならしめる教えが明らかにされて、仏の願いが満足された。かくしてそこで「譬喻品」では、三車火宅の方便の教えである羊車の声聞と鹿車の緣覺をすてて法華一乗である露地の大白牛車に乗せて、速やかに菩提に運ぶと説き、「提婆達多品」では、八歳の童女が宝珠を仏に奉り、象王である仏はこれを受けて、童女の成仏を証明した。「安樂行品」では、第一の身安樂行は、修行者が真理を悟つてこれを行い、真理を悟らないが親しく修習してこれに近づくことが安樂の室宅である。また「方便品」では、是くの如き相、是くの如きの性、是く

の如きの体、是くの如きの力、是くの如きの作、是くの如きの因、是くの如きの縁、是くの如きの果、是くの如きの報、是くの如きの本末究竟は十如是觀といわれ、心を一つの境界に住せしめる止めと、諸法の実相を究め尽す觀とを得るので、十如是は止觀の宮殿であるとする。また「見宝塔品」では、法身の住する淨土である常寂光土の永遠の法身仏である多宝如来と、教えを説く分身である報身仏である釈迦如来と一体融通して、永遠に総ての衆生を救済することを表わしている。

この住心の悟りの世界は、真理の本体は、よく眞の智慧であり、真理の智慧は常に真理の本体である。それは丁度、澄んだ水にあらゆるものを写す働きがあるごとく、鮮やかな金に絵姿が映ずるようなものである。水と金はすなわち眞の智慧の映つた影であり、映つた影はすなわち金と水である。取りも直さず知るべきである。対象そのまゝが、般若の智慧であり、般若の智慧そのまゝが対象である。だから無対象の世界といふのである。取りも直さず「実の如く自心を知る」ことであつて、これを「菩提」とするのである。

極無自性住心第九

極無自性心といふのは、今この安住する心の姿に二種類の目的とするところの考えがある。一には顕略の趣旨であり、二には、秘密の趣旨である。秘密の趣旨は後に次のように説かれている。これは普賢菩薩の悟りの境地の法門である。またこの法門は大日如来の悟りの一法門であると説かれている。

顕略の趣旨は、かの意味の深遠なものは須弥山をとりまく大海であり、険しく高いものは須弥山であり、広く大きなものは大空であり、永遠なるものは芥子劫である。一由旬立方の大城に満ちた芥子の数をもつて、劫の長いことを喩ていい、盤石劫である。盤石の喩によつて非常に長い劫を示したものである。そうであるけれども、芥子劫もなくなり、盤石劫も薄くなる時がくる。大空も量り知ることができる。須弥山は高さ十六万由旬であり、大海は八億由旬である。しかし近くして見難いものは自分の心である。細かくして大空に遍く満ちわたるものは自分の仏である。自分の心は広くしてその上大である。曆学者の巧曆、算数の達人の善知衆芸童子でも、心を計るのに心が迷つて、算盤をなげ、視力の鋭い離朱や、仏の十大弟子の一人で天眼第一の阿那律でも、眼が見えなくなつて見ることができない。夏の禹王は万物に名前を付けたが、心・仏には名を付けることができなかった。健脚家の夸父も、歩足をもつて、心の涯

まで歩こうとしたが、この心を測ることはできなかった。声聞、縁覚の智識をもってしても、自分の心・仏を知ることはできず、菩薩の智慧をもってしても、自分の心・仏は知ることができない。不思議の中の不思議であり、甚しい様の中の甚しいもの、それはただ自分の心の仏であろうか。

自分の心に迷うから、衆生が業によって生死を繰り返す六つの世界の波が震え動き、自分の心の心性を悟れば、一心の広大な水が澄んで浄らかな水である。澄んで浄らかな水は、宇宙觀に存在する数限りない影を写すように、自心の究極の根底としての心の仏は、総てのものをみて知るのである。生きとし生けるものは、この根本の道理に迷って、生死を繰り返して尽きることがなく、人びとは、非常に常態を逸したひどい酒酔いして、自分の心の本性を悟ることができないのである。

慈しみ深い父である偉大な悟りを開いた世尊は、自からの心性に帰るべき道を指し示した。帰り道は五百ヨージュナ、この心はすなわち旅の宿にも譬えられるものであり、旅の宿は常の宿ではなく、あらゆる条件に依ってすぐに移り変わっていく。移り変わってゆくので、定まった処はなく、この理由に依って、それ自体の定まった本質はない。総てのものはそれ自体の定まった本質が無いので、卑しきを退けて、尊しを取る。

このような理由で真如が無明に薫習されて縁起する至極の説、勝義として無自性であることの秘密の教えがある。第八住心である一道無為心は本当の悟りの境地ではないと指ではじいて驚かし、悟らせるのである。大空に等しい広大な第九住心がここに始めて起り、究極の悟りである第八住心も、かえって第九住心の原因となる。この原因もこの住心も、前の顕教の住心に対すれば、極果であり、後の第十住心と比べれば初心の住心である。初めて悟りを求める心を起こす時にすでに無上の悟りは完成しているということは誠にそうあるのが当然なことです。初発心の仏でもその徳行は思慮を超越してる。仏のあらゆる美德が始めて初発心の仏に顕れ、究極の根底として心が、いくらか現れてくる。この第九住心の心である極無自性心を悟れば、人間の世界と国土環境としての世界と、仏の世界を融会した十身具足の仏がそのまま自分であると知り、十箇の量等身がそのまま自分の心であると悟る。

華嚴宗の本尊、盧舍那仏が始めて、悟りを開いた時、第二・七日に普賢菩薩等の諸大菩薩等と広くこの仏華嚴三昧の義を話し合われた。これがすなわち『華嚴経』の世界である。

そうであるからそこで、蓮華藏世界を包んでもって家として、法の世界を包んで国とした。そして人間界の三処である。菩提道場、普光法堂、逝多林と天上界の四処である、忉利天、夜摩天、兜率天、他化自在天とを合わせて七箇処に説法の座を莊嚴して設け、その説法は八回に涉って『華嚴経』を開かれて説かれたが、普光法堂では二度集会したので、七処八会となっている。この『華嚴経』の説相の内容は、仏が海印三昧に入って説いたもので、一切のものが過去・現在・未来を通じて心の中に現われ、存在の真実にして不変なる本性のさわりなく、融け合うことを正しく見とおし、「性起品」にかの日照高山の喩にもとづき、すぐれた頓悟の機根に対して、心・佛・衆生の区別のないことを示す。「離世間品」には、過去・現在・未来の三世の各々に三世があつて九世となり、これを一つの刹那である極めて短き時に収め、極めて短い時間を長い時間に延べて、時間の伸びること、縮むことが自在であることと、さわりなく、融け合っていることを説き、「盧舍那品」「仏不思議法品」には、一つのもの、多くのものが互に融け合っていて、さまたげなく、しかも各自の本質を失わないで、普遍的真理である理と、差別的な現象である事が二にして一、一にして二の関係であることを説き、「小相品」には、帝釈天の網の珠玉が互いに重なつて相映り合っている譬と、灯火が互いに照らし照らされている喩を上げて示し、「入法界品」に、遂には、善財童子の教えを求める譚に、善財童子は初め覺母である文殊菩薩について発心し、五十三の善知識を尋ねて求法して、最後に普賢菩薩に皈依して悟った。善財童子が別教一乗の教えを見聞して、別教一乗に親しむ機会を得ようになる過去と、完全な理解を開いて円行を修する位と、仏の悟りに証入の三生において修行し、百余域を巡って善知識を訪ねた。「普賢品」には一つの行の中に一切の行を具える円行を修し、「小相品」に一つの煩惱を断ずるとき一切の煩惱を断除する。初めて悟りを求める心を起こす時にすでに無上の悟りは完成し、十信の位において五十二位の全き悟りが円満するといえるが、次第行布門である修行の階位に次第順序があるとする見方からすれば、因と果とは異ならないままに、初発心から十信・十住・十行・十廻向・十地の五位の次第を経過して華嚴一乗の大車を馳せ、相状と体性は障りがないから、如来の十身の差別そのまま大日如来の一身に帰するのである。以上説いてきた所が普賢菩薩の入る禪定である華嚴三昧の大意である。

秘密莊嚴住心第十

秘密莊嚴住心というのは、言い換えれば、これは究極は自己の人間存在の根本としての真理を悟り、本当の自分の分際を悟るのである。いうところの胎藏会の曼荼羅と金剛界会の曼荼羅であり、金剛頂十八会の曼荼羅である。このような曼荼羅に、それぞれに四種曼荼羅・四智印等があり、四種というのは、大智印、三昧耶智印、法智印、羯磨智印とがこれである。

このような四種曼荼羅、その数は量のはかり知れないほど多い。無数の国土を粉々にしたのも喩えにならないし、大海の水滴の数も比べることができないほどである。『大日経』「住心品」に「悟りはいかなるものか、言うことには、実の如く自心を知る」というが、これはこの一句に、量のはかり知れないほど多い意味を持つている。豎には十の重なりを持つ浅い深い意味を顕わし、横には無限の数の広く多いことを示している。また『大日経』「住心品」には「生にして不生、不生にして生なる心相は諸の仏の大きく広い秘密である。わたしは今、これを総て明らかに示します。」というが、言い換えればこれは豎の説である。言うことには、初め雄牛の疑惑の心より、段々に疑惑に背き、悟りに向う上をめざす次第である。このような次第に簡単に十種類があり、それはこれ迄にすでに説いたとおりである。

また言うことには、「また次に完全な悟りの境地を願ひ求める人は、自己の心の無限を知ることの理由に依つて、身体の無限を知る。身体の無限を知る理由に依つて、智慧の無限を知る。智慧の無限を知る理由に依つて、取りも直さず生存するものの無限を知る。生存するものの無限を知る理由に依つて、取りも直さず大空の無限を知ると、これは取りも直さず横の義である。生存するものの自分の心その数は無限である。生存するものの常態を逸したひどい酒酔いして悟らず知識せず、釈尊は生存するものの性質に随つて、その分際を明らかに示したものである。第四唯蘊無我住心と第五拔業因種住心の声聞と縁覚の二乗の人々は、ただ六識である眼・耳・鼻・舌・身・意の六種の認識の働きのみを抛り所とし、第六他縁大乘住心と第七覚心不生住心の法相宗と三論宗の両教はただ、八識である眼識・耳識・鼻識・舌識・身識の五識と第六の意識と第七の末那識と第八の阿頼耶識のみを示され、第八一道無為住心と第九極無自性住心の天台宗と華嚴宗の両教は、ただ九識である唯識説で立てる八識に菴摩羅識を加えて九種の識のみを抛り所とし、『釋摩訶衍論』には十識である、九識に乾栗陀耶識を加えて説き、大乘經典の王法である『大日経』には無限の心と無限の身体を説く。

このように身体と心の究極を知るは、取りも直さずこれが第十秘密莊嚴住心の住んでいるところを明らかにすることなのである。

このようなわけで、『大日経』「百字果相応品」にいうことには、「もし、偉大な悟りを開いた、世に尊き人が仏地に入るならば、自からまのあたり三三昧耶の境地に住するであろう」と。いうことには、三三昧耶とは、一には仏の形象をした部属の総称であり実存と現象との差別のない境地。二には仏の大悲を表わす諸尊の実在と現象との差別のない境地。三には金剛杵を持ち、如来の智徳を表示する諸尊の実在と現象との差別のない境地である。このように三部の諸尊その数が無限である。一つ一つの諸尊にそれぞれ四種曼荼羅を具えている。仏部は取りも直さず身体の働きである仏の秘密。法部は取りも直さずことばの働きである仏の秘密。金剛部は取りも直さず心の働きである仏の秘密である。⁽²⁷⁾

以上が『十住心論』の「大綱」の現代語訳である。⁽²⁸⁾

註

- (1) 定本弘法大師全集 第五卷六—七頁
- (2) 定本弘法大師全集 第五卷九—十頁
- (3) 定本弘法大師全集 第三卷一—六頁—一七頁
- 勝又俊教著 『秘藏寶鑰般若心経秘鍵』 佛典講座32 大蔵出版 一九七七年九月一日
- 宮坂宥勝訳 弘法大師空海全集 第二卷思想篇二 『秘藏宝鑰』 筑摩書房 一九八三年十二月十五日
- 加藤純隆訳著 『口語訳秘藏宝鑰』 世界聖典刊行協会 一九八四年四月二十一日
- 福田亮成著 『秘藏宝鑰密教への十階梯』 ノンブル社 一九九四年四月三日
- 宮坂宥勝訳注 空海コレクション 『秘藏宝鑰』 筑摩書房 二〇〇四年十月十日
- 以上現代語訳に参照
- (4) 定本弘法大師全集 第二卷三—四頁
- (5) 定本弘法大師全集 第三卷一—五頁
- (6) 定本弘法大師全集 第三卷二—二頁
- (7) 大正蔵七十一・一・上
- (8) 小野塚幾澄著 『空海教学における背景思想の研究』〔資料篇〕 山喜房佛書林

『秘密曼荼羅十住心論』 六九—三四二頁

(9) 小野塚幾澄著 『空海教学における背景思想の研究』〔資料篇〕山喜房佛書林 『秘藏宝鑰』 三四五—三七四頁

(10) 定本弘法大師全集 第二卷七頁

(11) 續真言宗全書第十九・四頁上・下
但し、『十住心論』には、

豎↓十重の浅深を顕わし。(定本弘法大師全集 第二卷三〇七頁) ↓乗乘差別にして浅深あり。(定本弘法大師全集 第二卷七頁) ↓心続生の相。(定本弘法大師全集 第二卷三〇七頁) とある。

横↓塵数の広多を示す。(定本弘法大師全集 第二卷三〇七頁) ↓智智平等にして一味なり。(定本弘法大師全集 第二卷七頁) ↓心の無量。(定本弘法大師全集 第二卷三〇八頁) とある。

(12) 宮坂宥勝解説 弘法大師空海全集 第一卷『秘密曼荼羅十住心論』 七四九頁

(13) 定本弘法大師全集 第三卷一一五頁

(14) 定本弘法大師全集 第二卷二八〇頁 「故に極無自性心生ずと曰う、此の心を前きの二劫に望むれば、由し蓮華の盛りに敷くるが如し。若し後のこの二心に望むれば、即ち是れ果復つて種と成る。故に経に如是初心佛説成佛因と曰う。前の二劫とは、他縁と一道との二種の住心を指す。後の二心とは真言門の根と究竟との二心を示す。」とある。

吉田宏哲著 『空海思想の形成』春秋社 一三四—一三六頁

(15) 宮坂宥勝解説 弘法大師空海全集 第一卷『秘密曼荼羅十住心論』 七四九頁

(16) 定本弘法大師全集 第二卷八頁

(17) 定本弘法大師全集 第二卷一四三頁

(18) 定本弘法大師全集 第二卷九—十頁

(19) 定本弘法大師全集 第二卷六十一頁

(20) 定本弘法大師全集 第二卷一〇九頁

(21) 定本弘法大師全集 第二卷一四七頁

(22) 定本弘法大師全集 第二卷一七三頁

(23) 定本弘法大師全集 第二卷一八九—一九〇頁

(24) 定本弘法大師全集 第二卷二四—二四二頁

(25) 定本弘法大師全集 第二卷二六一—二六三頁

(26) 定本弘法大師全集 第二卷二七五—二七七頁

(27) 定本弘法大師全集 第二卷三〇七—三〇八頁

(28) 現代語訳参考文献

勝又俊教著 『秘藏寶鑰般若心経秘鍵』佛典講座32 大蔵出版 一九七七年九月一日

遠藤祐純 福田亮成 宮坂宥勝 吉田宏哲訳注 弘法大師空海全集 第一卷思想篇一『秘密曼荼羅十住心論』筑摩書房 一九八三年十一月四日

宮坂宥勝訳 弘法大師空海全集 第二卷思想篇二『秘藏宝鑰』筑摩書房 一九八三年十二月十五日

加藤純隆訳著 『口語訳秘藏宝鑰』世界聖典刊行協会 一九八四年四月二十一日
津田真一訳著 大乘仏典〈中国・日本篇〉18空海 『秘密曼荼羅十住心論』中央公論社 一九九三年八月二〇日

福田亮成著 『秘藏宝鑰密教への十階梯』ノンブル社 一九九四年四月三日
宮坂宥勝訳注 空海コレクション『秘藏宝鑰』筑摩書房 二〇〇四年十月十日